

史跡探訪感想文

別府文学散歩に参加して

藤原隆博

別府史談会主催の別府文学散歩に参加した。JR別府駅の油屋熊八像前に参加者全員が揃ったところで、最初のJR別府駅と油屋熊八の説明を受ける。両手と左足を上げて別次元に向かつて飛翔せんとするスタイルが印象に残る。

文豪森鷗外と市電電車の関わり、別府駅前高等温泉、国際民宿「こかげ」などを見聞きしながら、次の古刹西法寺へと向う。

西法寺境内の一郭に松尾芭蕉の句碑が建ち、石灯籠の笠から句碑横の池に飛び込もうと身構える蛙が大変リアルである。

西法寺通りを南下した流川四丁目交差点に伊能忠敬測量史蹟の標柱が建ち、六十歳半ばの高齢での別府立ち寄りに驚かされる。

同三丁目の老舗松下金物店は、看板形式建築の採用とスク

ラッチタイトルの使用が特徴で、新技術早期導入は驚きである。楠町六丁目の不老軒は「かるかんまんじゅう」の老舗で、小説家で画家でもあった山口瞳ひとみやコメディアンのミヤコ蝶々も好んで注文したそうで、同かるかんまんじゅうの接待を受け、自然薯を使った独特の風味を味わう。

同一丁目の置屋跡は、木造二階建ての建物だけが現存する。三味線の音が響きそうので、花柳界華やかなりし頃の面影を偲ぶ。

同七丁目の軽食喫茶「アホロートル」は、前身は貸席「すずや」で赤線禁止前までは置屋とともに花街別府の一時代を築いた。

至近の浅利良道生誕地を訪ねる。丸山待子（後述）などと歌誌「大分歌人」を創刊。湯治客を詠んだ歌碑に往時が偲ばれる。

末広町二丁目の丸山待子生誕地と歌碑を訪ねる。実家は文人墨客政財界人が多数訪れる文化サロンでもあった。当時のカラー写真を見ると、待子の若いときは吉永小百合に酷似の美人である。

千代町十一丁目の紙屋温泉は、路地裏温泉巡りの一コースで飲泉でも知られ、丸山待子が母を詠む歌碑に胸を打たれる。

同十三丁目の「竹久夢二と笠井彦乃」の石碑は、別府が舞
台の夢二と愛人彦乃の悲恋の物語が綴られ、大正ロマンを彷彿とさせる。

同三丁目の楠銀天街沿いにある中浜地藏尊で一願石を拝する。昔はこの前の中浜筋が海岸線であったとは驚きである。

元町十六丁目の波止場神社は海の神様で、境内には松方正義揮毫の「別府築港之碑」が建つ。隣接する現存の稲尾和久投手旧宅に感激。

今回は流川の奥深い歴史とロマンに触れて有意義な半日を過ごせた。機会があれば壽温泉の流川文学碑を、ぜひ訪ねてみたい。



竹瓦温泉